

北海道ポーランド文化協会の設立
(ポーレ創刊号)

POLE

北海道ポーランド文化協会会誌「ポーレ」
創刊号 1987.11.16

発行
北海道ポーランド文化協会
〒060 札幌市中央区北2西2
道特会館 NDA 画廊内
電話 221-8672

北海道ポーランド文化協会

設立総会開かれる

北海道ポーランド文化協会の設立総会・祝賀会は、さる十月二日六時三十分から、札幌市の京王プラザホテル地階のインドアプラザで百四名の参加者を集めて盛大に行われた。

総会は、設立発起人代表の今村成和元北大学長の開会の辞で始まり、灰谷慶三氏の司会で、吉田宏氏による経過報告および本間富雄氏による会則案の説明等が行われた。会則案については質疑応答があり、審議の結果、原案どおり承認された。ついで役員の選出に入り、会長に今村成和氏、副会長に遠藤道子氏を選出した。また事務局長に吉田宏氏、監査委員に方波見和夫・相馬純吉両氏、運営委員に伊東孝之氏以下十一名を選出した。

同日、午後七時二十分からは、同じ場所、真光孝美さんの司会で設立祝賀会が華やかに行われた。遠藤道子副会長のあいさつのもと、来賓の北海道日米協会専任理事の長谷井真信氏が祝辞を述べ、北大スラブ研

のセンター長伊東孝之氏の音頭による乾杯で祝宴に入った。祝宴では、シヨパン協会の遠藤道子、大竹貞、中村玲子、薄井豊美、伊東美枝子、中村美由紀、ジュレミー・ウイリアムス、野谷恵各氏によるピアノ演奏のほか、札幌フォークダンスクラブによるポーランド民族舞踊が行われ、会場の雰囲気盛り上げた。最後に、小樽商科大学の和田完氏がめくくりのあいさつを行って、閉会となった。

発起人代表のあいさつ

今村成和

一言発起人を代表致しましてご挨拶申し上げます。

本日は皆様お忙しいところを本会のためにご参集くださいます誠にご有難うございました。

私共発起人一同は、さる六月

設立祝賀会で自己紹介する札幌在住のポーランド人の方々



二十四日に第一回の発起人会を開催致しまして以来、準備を重ねて参った次第でございますが、本日までには百五十名を超える方々の入会申し込みを頂き、ここに設立総会開催の運びとなりましたことは、誠に感激の

極みでございます。これからは皆様と共に本会の発展のために力を尽くして参りたいと存ずる次第でございます。どうか宜しくご協力の程をお願い申し上げます。

本会は会則案第二条にございますように、「北海道とポーランドとのあいだの文化交流を促進することを目的」といたしておりますが、その性格は次のようなものであると考えております。

第一に、本会は純然たる民間団体でございます。内外何れの政府との関係におきましてもその外郭団体としての性格は持っておりません。もとよりこれらの政府機関とのあいだに良好な関係を保つことは望ましいことではございますが、政府とは無関係に設立され、自主的に運営される団体でございます。又、特にスポンサーになつて頂いている向きもございません。政治その他の流れにも左右されず純粹に文化交流のためにお役に立ちたいと考えている団体でございます。

第二に、本会は、特定の分野或は専門家に偏ることなく、ポーランドとの文化交流に関心をお持ちの方々に広くご参加願ひ、力をお貸し頂きたいと存じております。現に会員構成がそのような広がりを持つものと

なっておりますことは、大変に力強いことではございますが、今後の皆様のご協力も得まして、本会がこの方向に一層の発展を遂げますことを心から念願している次第でございます。

次に、本会の運営方針についてでございますが、本会が成功し発展するかどうかは、今後、活発な事業活動が展開されるかどうかにかかっています。申すまでもございせん。差し当りの事業計画につきましては、後程吉田会員からご説明申し上げますので、それによってご了承願ひたいと存じます。私共はそれらを単なる机上

「ポ文協」の

設立をお祝いします

初めに、北海道ポーランド文化協会の設立をお祝いするとともに、札幌在住の私達ポーランド人を、その発足記念パーティーにご招待いただいたことに、心よりお礼申し上げます。こんなにも多くの皆さんが、ポー

プランに終わらせることなく、早速にも行動を開始する予定でありますことを申しあげて、皆様の力強いご協力をお願い申し上げます。

本日は、皆様お忙しいところをお集まり頂きましたのに、会の運営には至つて不慣れな素人集団の手により準備を進めましたので、諸事不届となり皆様には色々ご迷惑をお掛けしたと存じます。ここに一同に代わりまして深くお詫び申し上げます。ご挨拶を終わらせて頂きます。どうも有難うございました。

熊倉 ハリーナ

ランドに関心をもたれていることを知り、大変嬉しく思いました。

このパーティーに出席した当初、ポーランドから遠く離れた札幌で、なぜこんなに多くの人達がポーランドに興味をもたれているのか不思議

に思いました。しかし、皆さんの挨拶の言葉を聞き、ピアノ演奏、民族舞踊が披露され、また個人的に皆さんとお話ししているうちに、その答えが出てきたように思われます。ポーランドへの旅行体験、シヨパンの音楽や民族舞踊に対する関心などがその根底にあることがわかりました。そして北海道ポーランド文化協会が設立されたことにより、そうした様々な活動がこの会を中心に発展し、北海道の多くの人々にその輪を広げることができるようになったことは、大変素晴らしいことです。

私は日本に来て十年、札幌に住んでから一年半がたちます。正直いって、札幌の皆さんがこれほどポーランド文化に興味をもたれているとは思いませんでした。

日本ではポーランド映画に対する関心もかなり強いものがあるようですので、映画の分野にも活動の幅を広げていただければと思います。

東京では、ポーランド語の講師を勤めていましたので、ポーランド語を勉強された方がいらつしやいましたらどうぞご連絡下さい。

設立の経緯

灰谷慶三

北海道ポーランド文化協会設立に至るまでの経過を以下に簡単に記す。

ポーランドと北海道との文化的な結びつきは、人の交流も含めて、音楽、絵画、演劇、映画等々の分野で以前から盛んに行われていたのであるが、とりわけ、今回協会の事務局長に選出された北大工学部の吉田宏氏のもとでは、継続的に学术交流がはかられ、その関係で、ポーランド第二の都市ウツチでは、工科大学学長クロー氏を中心に日本協会の設立を見たのである。以上の状況にかんがみ、北海道でもなんらかの組織を結成する段階に至っているという判断から、吉田氏の呼びかけで北大内のポーランドに関わりを持つ人間が会合を開いたのが、今年四月二十五日のことであった。そこで得た結論は、学术交流という狭い枠にとどめ

るのではなく、一般市民の広い参加を得た、というより一般市民が中心となる文化交流の活力ある組織をつくるべきだということであった。

かくして、六月二十四日第一回発起人会が開かれ、大学以外の方も含む二十一名が参加した。この席では、会の基本的性格について議論が行われ、会長挨拶にもあるように、政治には関与せず、文化交流に限って、しかもできるだけ開かれた会とする事が確認されると共に、それに関連して、会則等、とくに会員の種別と会費について検討されたが、結論をみるに至らず、発起人の中から選出された十一人の世話人会にゆだねられた。また発起人代表には元北大学長今村成和氏を選出した。

その後、八月末まで、三回にわたって世話人会が開かれ、会員・会

費を含む会則案の検討、役員案の素案づくり、事務局設置場所の確定、事業案の策定、発起人会の拡大（最終的に七月二十二日夕切で三十六人となった）、会員募集の具体的手順の決定、設立総会及び記念祝賀会開催の検討等を行った。この間、七月二十九日からは発起人によって実際に会員募集が開始された。

九月十日には第二回の設立準備会が開かれた。ここでは、会員の募集を含む設立準備状況の報告、会則案の確定、役員候補者の確定、設立総会及び記念祝賀会に関する最終確認、事業案及び予算案の決定等を行った。更に、九月二十四日には第四回目の世話人会を開き、設立総会へ向けての準備の最終確認を行ったが、この席での予想を上回る百人以上の方々の御出席を得て、設立総会及び記念祝賀会は成功裡に終了し、ここに北海道ポーランド文化協会は正式に発足したのである。

（本会運営委員、北大文学部）

追記 この経過報告は吉田事務局長が執筆の予定であったが、急な都合により、灰谷が代筆したものである。

北海道ポーランド文化協会

役員名簿

会長	今村 成和
副会長	遠藤 道子
運営委員	伊東 孝之 大竹 貞 小笠原正明 （会計担当） 小林 暁子 霜田千代麿 灰谷 慶三 長谷川洋行 藤原 勲夫 本間 富雄 三澤 正博 和田 完 吉田 宏 方波見雅夫 相馬 純吉
事務局長	吉田 宏
監査委員	相馬 純吉

私とポーランド

22年前のワルシャワ

遠藤道子

超える人数となり、ポーランドに対する関心の深さに驚きつつ、協会の幸先を喜び合いました。

私とポーランドのつながりは、二十二年前にさかのぼります。国際シヨパンコンクールがワルシャワで五年毎に開催され、それに娘が参加するためでした。私も娘時代からシヨパンに傾倒しておりましたから、日本シヨパン協会の支部を十五年前に札幌、帯広、函館の順に道内三カ所に設立し、現在までにポーランドと音楽を通しての交流を行っております。今回の北海道ポーランド文化協会の設立は、ポーランドの文化、歴史、芸術等の理解を深めるにはまたとない機会で、だれよりも私自身がその誕生を喜んでおります。

北海道ポーランド文化協会が設立されて、十月二日に京王プラザホテルで、発会式が華々しく開催されました。

お誘いを受けた第一回の集合には、北大を中心にした立派な先生方ばかりでしたが、会の趣旨を伺うと、広く一般の方々も気軽に入会できるということでした。そこでご一緒して呼びかけましたところ、百五十名を

一九六二年の二月初旬、厳寒のワルシャワは、北海道の寒さになれた私共でも痛いほどで、その肌を刺す寒さに閉口いたしました。コペンハーゲンから小さなプロペラ機に乗り、夕暮れのワルシャワに降りたつた時は、白一色の雪景色に山小屋か兵舎の様な建物がポツンとあるだけで、これから先はどんなことになるのかと、言葉も通ぜず全く心細いものを感じました。ドム・クオーバー（農民の家）という宿に入り、物珍しくしげしげと眺められ、パデレフスキー（ポー

ランド元首相、ピアニスト、作曲家）が住んでいたというプリストルホテルでは、モンゴル人が一列に並び、ジーツと我々親子をにらみつけるので、気味が悪く、逃げだしたい気持ちでした。また、クラクフのホテルに泊まっていた時には、部屋のドアの外に大男が立っていて、一歩も外に出られなくなり、警察を呼ぶほどの騒ぎとなりました。身の危険を感じて、用意していたナシヨナルの百十番のブザーを身につけました。とにかく日本人が珍しいのだそうです。

戦後二十年余りで、復興がならず、爆撃でビルが破壊されたままの残骸があちこちに散在し、まるで幽霊屋敷のような不気味さでした。古くからあった只今改築中のプリストホテルも、ドイツ軍との戦いで、外壁には蜂の巣のように弾丸が食いこんでいました。ピアノ練習用に借りたアパートは、戦争で怪我をした人のアパートで、義足が玄関前に立ち並び、グランドピアノの脚が一本とれてないまま、辞書を高く積み上げて脚の代用をしている状態でした。練習用のピアノは、戦争のために数少なくなり、すべて状態が悪かったのですが、現在香川大学の鈴木輝二先生のお世話で、文化宮殿大ホールのスタ

インウェーピアノで練習できたのは幸運でした。

ポーランドの人々は、大変親切で世話好きです。特にツエルニー・ステファンスカご夫妻には、娘が通算六年間も居候になり、レッスンから食事、すべてが無料という親身も及ばぬほどのお世話になりました。このことは、終生忘れることができません。

シヨパン協会設立五十周年の式典がワルシャワであり、日本シヨパン協会会長の安川加寿子先生の代行として出席し、その後日本シヨパン協会は世界連合に正式加盟をいたしました。北海道シヨパン協会支部は十五年目を迎え、ポーランドとの交流を深めています。昨年はポーランドよりポーランド文化功労賞をいただき、身にあまる光栄に浴しました。

本年誕生した北海道ポーランド文化協会共々、ポーランドとの文化交流に微力ながらお役に立ちたいと考えております。

（本会副会長・日本シヨパン協会北海道支部支部長）

札幌市はポーランド人が滞在したり、訪れたりする都市として、日本でも最上位にランクされます。それらは研究のために大学に招かれた学者であったり作品発表のために訪れた芸術家であったりします。

いうまでもなくポーランド人と直接話をしたり一緒に生活をしたりすることは、ポーランドとポーランド人をより正確に知るための有力な方法です。札幌はそういうことができ、可能性を持った、日本でも有数の都市といえそうです。

この六月以来、二人のポーランドの画家が作品を発表するために札幌を訪れました。二人のホームステイを引き受けられた小林暁子さんと佐々木秀明さんに、本号と次号にその感想を書いていただくことにしました。お二人ともこのホームステイが縁となってポーランドと出会い北海道ポーランド文化協会に参加される方です。

(長谷川洋行)

カーシヤの贈りもの

小林 暁子

シヨパンとキュリー夫人位しか連想できなかったポーランドが急に身近な国になったのは、今年の夏、版画家カテリーナ・オルトヴァインの民泊を依頼されたのがきっかけです。

カーシヤ(カテリーナの愛称)はブルガリアのソフィア出身ですが、ここ十一年程ポーランドの首都ワルシャワに住んでおり、NDA画廊の招きで来日して、札幌その他で個展を開いたのです。

六月二十二日から七月六日までの二週間、金髪でチャームングなカーシヤは、一緒に料理を作ったり、美術の話をしたり、まるで私の妹のよう我家になじんで過ごしました。

外国人にとって民泊は、その国の人と身近に深く、広く知合いになれるという点がなによりの魅力だと思えます。私の家にいる間にもカーシヤは多くの人に会い、いろいろな経験をしました。

まず、児童文学研究会の女性たち

と、ポーランドの子供の本の話を中心に、生活、文化の話をし、美術館のボランティアの人たちとは、ポーランドの芸術、文化について、というテーマでサロンディスカッションをし、沢山の質問を受けました。通訳はいずれの時も、北大留学生のポイテック・ホルシンスキーさんがしてくれました。この他、お茶やお花のおけいこや、友人の家などに招かれて、いろいろな日本人の生活を見ましたが、カーシヤに会った人たちも、ポーランドという国に深い興味をもったようです。

北海道は本州に比べて、見せるべき日本のな物は何も無い、とよく云われますが、外来者に対する開放的な気性から、ナマの生活を見せることは出来ると思えます。

カーシヤの個展が終わった日の夜、札幌在住のポーランドの留学生と、ポーランドに関心のある友人たちを我家に招き、ささやかなパーティー

小林家でのホームパーティー



を開きました。この機会にポーランドの人と思いきりおしゃべりが出来たら素晴らしいと思ったからです。途中でアメリカンセンターの館長夫人もとび入りで加わって、大変にぎやかで楽しい国際交流の場になりました。

その時留学生たちが、日本人の家庭に招かれたことはほとんどない、

日本人と親しくおつき合いしたいのに、と話していたのが強く印象に残りました。国際交流、国際理解などと云われるこのごろですが、留学生などを気軽に家庭に招いて、お互いの国のことを本音で語り合ったり、その家庭を通して市民の中になじんでいく、といった生き生きとした交流

【エスペラント語】 ザメンホフ生誕 百年記念大会に参加して 馬場 恵美子

か？
エスペラント語を知っていますか？
ポーランド生まれのザメンホフという人が作った人造語、国を持たな

は、まだあまりされていないような気がします。

以来、私のポーランドへの関心とつながりは深いものになってきています。素朴で大らかな友人カーシヤが、私にポーランドという新しい魅力的な世界をもってきてくれたのです。

い言葉です。彼は言葉による「わだかまり」や「無理解」をつまらぬものと思っていたからです。日本では、隣あう人は同じ言葉で同じ髪の色、これは当り前のことです。けれども陸続きで外国と接している多くの国は、民族意識や宗教のために結束が堅く、ともすると悪い意味で一つの力となってしまうこともあるのです。「話したい」、「話し合いたい」、そんな気持ちでザメンホフが国際語と呼ばれるこの言葉をつくる下敷となっていたのです。そのエスペラント語が誕生して、今年にはちょうど百年目にあたります。毎年世界大会が各国で開催され、今年もポーランドの首都のワルシャワで七月末から八月上旬まで行われました。北海道からは十二名、記念大会ということで各国から五千人が参加しました。ワルシャワはエスペランティスト（エス

エスペランティストの一人と筆者。着ている着物は「北海道くサツポロ」のゆかた。



ペラント語を使う人をこうよびます)でいっばいです。この言葉を使うことで、初めて会った人でも、すぐ何年も前から知り合っていた家族のようにに親しみを持つことができるのです。

ワルシャワは新しい街です。大戦で市内はほとんど打ち壊され、今建っているものは歴史を感じさせないものばかりです。「せっかくヨーロッパに來たのに何とも味けのない」といっ

た人もいます。そんな人も旧市街と呼ばれる地域へ行くと顔色が変わっています。広場を中心として放射状に広がる小路、石だたみ。ウィンドーを飾る素朴な品々、美しい教会。修道服に身を包む姿は、中世の貴婦人を思わせます。色とりどりのタイルの家。いったいどんな人が住んでいるんだろう。

私は疑ってしまいました。このすばらしい所を、ひとりひとりが当時の写真や絵を持ち寄り、ガレキの中から積み上げていったとは。自分のふるさとを守るワルシャワの子の執念を感じずにはおられませんでした。

市内いたる所に花が添えられています。戦争での死者を弔うためです。ポーランドは様々なところに侵略された悲しい歴史を持つ国です。悲しい思いを忘れない国なのです。

今回ユダヤ人収容所(トレブリンカ)を訪ねる機会がありました。小雨降る中、平和そのものに整えられ、過去には何もなかったかに見えます。しかしメモリアル公園の赤土の中には土以外の成分が混じり合っている。それが現実です。

「決して忘れない」……メモリアルを大切にする国民なのです。ワルシャワ郊外は、なだらかな丘が続く農業地帯で、どこか北海道を思わせる美

しい所です。八月には街路樹のナナカマドが赤く色づきます。楽聖と呼ばれるシヨパンもこの国を愛してやまなかつたそうです。民衆の祖国を思う心は、どこにも負けないものを持つているのです。戦後生まれの私には、頭を打たれるほどのシヨックです。だからこそザメンホフも共通語を作り出したかったのではないでしょうか。

「平和の意味を考え直す」……ポーランドはそれを教えてくれた国なのです。

(会社員)

【講演の内容】

伊東孝之

日本とポーランドで似ているものといったらなんだろう？ いろいろあるだろうが、私は武士とシラフタではないかと思っている。シラフタというのは、ポーランドの封建支配層のことだ。日本の封建支配層、つまり武士が独自の文化、生活様式、価値観をつくり出し、それが今日もなお私たちの思想や行動を規定していることはよく知られている。ポーランドでもシラフタの影響力はシラ

北海道ポーランド文化協会創立記念講演会

日本の武士とポーランドのシラフタ 伊東孝之

ポーランドの義務教育をかいまみて 藤原勲夫

(北大スラブ研究センター)

(札幌市立東川下小学校)

日時 昭和六十二年十一月二十八日(土) 午後一時より

場所 札幌市教育文化会館 四階講堂

(北区北一条西十三丁目) (入場無料)

フタそのものが減んだあとも強く残った。

ポーランド人にはなんとかスキーという名前が多い。スキーといのはもともと、どこそこに所領を持つ、という意味で、封建領主の血筋を示している。実際にはかなりの姓氏改名が行われているので、本当にシラフタの血筋かどうか怪しい場合が多いが、自分の名前を誇りに思っているポーランド人が多いのには驚かされる。

ポーランドを訪れた日本の婦人が、男性からいきなりハンドキスされてドギマギしてしまったという話はよ

く聞く。実はこれもシラフタの慣習で、昔はヨーロッパではどこでもそうだったのだ。婦人への礼儀は、中世ヨーロッパ騎士道の一つの徳目である。面白いのは、ほかのヨーロッパ諸国では封建支配層が没落するとともにハンドキスの慣習も廃れてしまったのに、ポーランドではそれが封建支配層以外にも広まって今日にいたっていることだ。

封建支配層の文化には国境や民族を越えた共通性がある。しかし、たとえば女性崇拜の思想が日本の封建制には欠けていたことが示すように、どの国の封建制もそれぞれ独自性を

持っている。その相違が、実は今日のわれわれをも規定していることがしばしばある。わが国では、いったん封建制を抜け出してしまえば、どの民族も同じように「近代的」になるという考えが一般的のようだが、必ずしもそうでない。

そこで、日本の武士とポーランドのシラフタを比べて、どこがどのようになっているか、どのように違っているのか、それはどこからきたのか、今日の両国民の思想と行動にどのような影響を与えているか、ということと一緒に考えてみたいと思う。

藤原勲夫

ポーランド クロニクル

ワルシャワ日本人学校は、私が赴任して五カ月後の昭和五十九年九月一日に、ミオベンツカ通りに借家を見つけて移転した。

それまでの六年と五カ月の間は、ワルシャワ市の中心にある公立小学校（七十五番小学校と呼ぶ）の間借りであった。私が見たその公立小学校の様子を中心にしながら、家主にあたる女性校長の話をもとにポーランドの義務教育について紹介したい。

国際交流プラザ サロンディスプレイ

日時 十一月十九日（木）
午後二時～三時半
テーマ 「最近のポーランド事情」
ゲスト イエジ・マレク・ルジンスキ（北大理学部大学院生）
言語 英語（通訳つき）
後援 北海道ポーランド文化協会
場所 中央区北一条西三丁目
札幌MNビル（時計台向い）

(1)

一九八七年

【七月】

七月三十一日

◆ウイーンでポーランドの対外民間債務の繰延べが妥結。

【八月】

八月六日

◆米国下院歳出委員会は「連帯」労組に、百万ドルを支出したことを認める。

八月十二日

◆ポーランド航空(POL)は、五月九日に起きた墜落事故（死者百八十三人）と関連して、ソ連製の長距離旅客機Tu-154全機の運行停止とアメリカの航空会社からのDCAの借入れを発表。

八月十八日

◆政府は、東ドイツとの間に領海をめぐる紛争があることを公式に認める。

八月二十二日

◆カトリック教会は農業基金再申請を発表。農業基金とは教会の仲介によって外資を導入して個人農の近代化を図るといふもので、一年前に政府の反対で最終的に破綻したと見られていた。

八月三十一日

◆ソ連共産党機関誌「コムニスト」十一号はヤルゼルスキ・ポーランド第一書記の論文「新しい視角に寄せて」を発表。ヤルゼルスキはそのなかで、スターリンの粛清、独ソ不可侵条約期のソ連の対ポーランド政策を批判、「社会主義的多元主義」を提唱。

【九月】

◆この月、各地で列車事故、バス事故が多発し、多数の死者が出る。

九月四日

◆ワルシャワで経済人協会（日本の経団連に当たる）が発足。

九月五日

◆「ポリテイカ」誌によれば、二十億ドルが民間人の外資預金として銀行に、およそ二十億ドルがタンス預金に、しかし国の外貨準備はほとんどゼロ。

九月十二日

◆クラクフの本屋で『日本美術』週間ベストセラーとなる。

九月二十六日～二十九日

◆アメリカ副大統領ブッシュがポーランドを公式訪問、政府代表者だけでなく、ワレサとも会談。

【十月】

十月八日

◆党中央委員会総会開催、経済改革第二段階を審議。十一月二十九日に国民投票にかけることを決議する。第二段階は、①経済システムの改革、

とくに企業の自主性拡大、②組織構造の改革、とりわけ中央の省庁の大幅削減、③所得・価格改革、から成立ち、企業の倒産、失業、所得格差の拡大、証券市場の創出、生活基本物資の値上げも辞さないという大胆な内容を含む。ポーランドにおける国民投票は四十年ぶり。

十月十日

◆国会が国民投票案を可決。

十月十四日

◆政府は、今後一週間に一度、「アメリカの声」、自由ヨーロッパ放送、フランス放送、西独放送、BBCなど西側放送局のポーランド問題についての解説番組を、コメントなしで国営放送を通じて中継する意向ありと発表。十九日に初めてこの主旨に沿った新番組「西側は語る」を放送。

(2)

【十一月】

十一月初め

◆中等学校用の性教育教科書『家庭生活に備えて』が父兄、教会関係者、国民愛国戦線の抗議にあつて二カ月で回収される。セックス論議が勃発。改革派の「ポリテイカ」誌は擁護、非合法反対派も「週間マゾフシェ」誌などは擁護、合法反対派の「週間普遍」誌は沈黙。

十一月十五日

◆リビンスキら反体制派知識人がポーランド社会党(P.P.S.)を復活させる。

十一月十九日

◆公民権オンブズマンに無党派の法学者エヴァ・ウエントフスカ女史が任命される。手続き問題をめぐって国会が紛糾。

十一月二十九日

◆経済改革(第一問)と政治改革(第二問)についての国民投票が行なわれる。投票率は六七・三二%、第一問賛成六六・〇四%(有権者数の四四・二八%)。第二問賛成六九・〇三%(有権者数の四六・二九%)。法的には賛成票が有権者の過半数に達しなかったため拘束力をもたない。しかし、投票者の三分の二が賛成であったという事実は政治的な意味をもつ。

【十二月】

十二月十五日

◆党中総、一時失脚したと見られていた改革派のラコフスキ元副首相が政治局員に選ばれる。

十二月二十三日

◆新しい月刊誌「対決」の創刊号が出る。国民愛国戦線がスポンサー役。その目的は、最近のポーランド史の「空白」を埋めること。

十二月二十八日

◆世論調査センターの調査によれば、すべてのポーランドの機関・組織の

中で何を最も信頼するかという問に対して、回答者の七十八%が教会と答え、四十%が党と答える。

十二月二十九日

◆最高裁判所がポベウシコ神父殺害事件の四人の犯人(秘密警察官)を減刑。

十二月三十日

◆国家評議会、国民議会(地方議会)選挙法改正を提案。

一九八八年

【二月】

一月一日

◆公民権オンブズマンが仕事を開始。一月だけで一万二千件の申し立てが殺到。

一月七日

◆軽油不足が深刻化。ディーゼルエンジンを使う運輸交通機関に支障。

一月十日〜十三日

◆ゲンシャール西独外相来訪。

一月十三日

◆労組全国協議会、政府の所得価格政策に反対を声明。

一月十六日

◆「ポリティカ」誌、ワルシャワ大学教授で「連帯」史の著者イエーシ・ホルツェルの政府と反対派の和解と協力を訴えたヤルゼルスキとワレサ宛公開状を公表。

一月二十日

◆政府は労組の要求に歩み寄って、インフレ手当として二月一日から六千

ズロチの一律賃上げ(当初案では千七百五十ズロチ)、三千二百ズロチの年金引き上げ(当初案では二千八百ズロチ)を発表。ちなみに一九八七年末の平均賃金二万九千二百ズロチ、平均年金一万七千ズロチ(引き上げ率はいずれも約二十一%)。

一月二十二日

◆グレンプ首座大司教がロシア・キリスト教受洗一千年記念式に出席するためソ連を訪問する予定と発表。

一月三十日

◆政府、値上げを発表。二月一日から食料品四十%(十一月十四日の当初案では百十%)、ガソリン六十%(当初案では二百%)、軽油百%、運賃五十%、家賃五十%(当初案では二百%)、ラジオ・テレビ視聴料七十五%、それぞれ値上げ。三月一日から保育園・幼稚園料金、四月一日から石炭二百%、ガス、電気

代、暖房料金百%値上げ。平均的に三十六%の値上げ。ただしこれは中央で決められる価格だけの平均であって、アルコール・タバコ、自由価格、闇市場価格は含まれない。

【二月】

二月十一日〜十二日

◆国会、国民投票の結果を考慮して経済改革第二段階実現綱領を修正可決。

二月十四日

◆新社会党が分裂。議長リプスキは

警察の手先が浸透したと発表。

二月十五日

◆バチカンで政府代表、司教会議、バチカンが外交関係回復交渉を再開(教会関係者、年内にも可能と予測)。

二月十八日

◆政府報道官ウルバン、三月事件(一九六八年の知識人弾圧事件)の公式の再評価を含んだ文書を近く発表すると言明。

二月二十日

◆ロックフェラー財団の援助で農業開発基金が発足。

二月二十八日

◆ポーランド農民党(P.S.L.)復活のための集会在警察によって解散させられる。

【三月】

三月一日

◆政府機関紙「ジエチポスポリタ」元記者、M・ダスティフ、T・ポドヴィソツキが日本商社に情報を売渡していたという理由で、それぞれ八年、十八カ月の刑を言渡される。

◆チョコレート(チョコレート)の配給カード制廃止。

◆配給カード制が残るのは肉、肉製品、ガソリンだけとなる。

三月二日

◆コンピュータ式の身分証明書制度が導入される。

(作成・北大スラブ研・伊東孝之・創刊号87年11月、4号88年8月)

(117ページにつづく)